

“Lycius, look back!”

——「レイミア」をめぐる視線

熊谷 めぐみ^a

^a 湘北短期大学

【抄録】

本論文では、ジョン・キーツの詩「レイミア」の主人公レイミアをめぐる視線を分析する。美しい人間の女に姿を変え、コリントの若者リシアスを誘惑する蛇女レイミアは、男を破滅へと導く「運命の女」として捉えられる。同時に、この作品は、第一部と第二部では、レイミアの描かれ方が異なり、作品における矛盾として批判されることも少なくなかった。しかし、彼女をめぐる視線に目を向ける時、男を翻弄する残酷な美女としての「運命の女」像とは異なる、レイミアの悲劇的な一面が、一貫して浮かび上がってくる。本稿では、レイミアをめぐる視線を分析することで、見過ごされる存在としてのレイミアに着目し、彼女の持つ悲劇性を明らかにする。

レイミアが痛みと引き換えに美しい人間の容姿を手に入れても、彼女は視覚的に相手を引き付けることができず、聴覚によるアプローチで相手の心を手に入れる。しかし、それは聴覚への支配が終われば崩れ去る脆い関係でもあり、実際、世俗の音に心動かされたリシアスとの間で愛の終わりが訪れる。

レイミアはリシアスやヘルメスの目に留まることを望みながら、視覚的な力では彼らを振り向かせることはできず、彼女の持つ魔術的な言葉に頼る。しかし、彼女が唯一求めなかった視線、アポロニウスの、彼女の正体を暴くその視線だけは、真っ直ぐに向けられるというのは辛辣な皮肉である。また、レイミアはアポロニウスの視線のみならず、キーツの執筆から数十年が経過した後、「運命の女」の格好の題材としてラファエル前派の画家たちによって描かれ、好奇や欲望の視線にさらされることになるのだが、皮肉なことに絵画となり好色の視線を受けることで彼女の姿は現在まで鮮やかに生き延び、ある種の不滅性を帯びることになった。

【キーワード】

ジョン・キーツ 「レイミア」 視線

1

物語詩「レイミア」(“Lamia”)は、詩人ジョン・キーツ(John Keats 1795-1821)によって、彼の二十五年という短い生涯の中で、「驚異の年」と呼ばれる1819年に書かれ、翌1820年の7月1日に

出版された第三詩集、*Lamia, Isabella, The Eve of St. Agnes and other Poems*の巻頭を彩った作品であった。第一部の執筆後に詩人は、“I have great hopes of success, because I make use of my Judgment more deliberately than I yet have done”(Letters 128)と、作品への自信を手紙(1819

年7月11日付)に記している。美しい人間の女に姿を変え、コリントの若者リシアスを誘惑する蛇女レイミアは、男を破滅へと導く「運命の女」として捉えられる。同時に、この作品は、第一部と第二部では、レイミアの描かれ方が異なり、そのことが作品における矛盾として批判されることも少なくなかった。

しかし、彼女をめぐる視線の問題を検討するならば、男を翻弄する残酷な美女としての「運命の女」像とは異なる、レイミアの悲劇的な一面が、一貫して浮かび上がってくることが分る。本稿では、レイミアをめぐる視線を分析することで、見過ごされる存在としてのレイミアに着目し、彼女の持つ悲劇性を明らかにしたい。

2

キーツは、「レイミア」の着想を、ロバート・バートン (Robert Burton) の *The Anatomy of Melancholy* (1621) から得たのだが、その第一部冒頭部分は、バートンにはない、ニンフ (nymph) に恋するギリシアの神ヘルメス (Hermes) の描写から始められている。麗しのヘルメスは恋い焦がれるニンフの姿を追い求める。

From vale to vale, from wood to wood, he
flew,
Breathing upon the flowers his passion new,
And wound with many a river to its head,
To find where this sweet nymph prepar'd
her secret bed: (I.27-30)

しかし、追い求める相手は、“the sweet nymph might nowhere be found” (I.31) という存在であり、神であるヘルメスをもってしても見つけることは適わない。そこで、嫉妬に駆られながらも休

息を取ったヘルメスの前に現れたのが、彼との取引を望む蛇女レイミア (Lamia) であった。かつては一人の女であり、蛇に姿を変えられたと語るレイミアは、コリントの青年リシアス (Lycius) に一目惚れし、その恋心を叶えるために、ヘルメスに取引をもちかける。そして、ニンフの姿が見つからないのは、彼女の力によるものであることを明らかにする。

'Too frail of heart! for this lost nymph of
thine,
'Free as the air, invisibly, she strays
'About these thornless wilds; her pleasant
days
'She tastes unseen; unseen her nimble feet
'Leave traces in the grass and flowers
sweet;
'From weary tendrils, and bow'd branches
green,
'She plucks the fruit unseen, she bathes
unseen:
'And by my power is her beauty veil'd
'To keep it unaffronted, unassail'd
'By the love-glances of unlovely eyes,
'Of Satyrs, Fauns, and blear'd Silenus'
sighs.
'Pale grew her immortality, for woe
'Of all these lovers, and she grieved so
'I took compassion on her, bade her steep
'Her hair in weird syrops, that would keep
'To wander as she loves, in liberty.
"Thou shalt behold her, Hermes, thou alone,
"If thou wilt, as thou swearest, grant my
boon!" (I.93-111)

ニンフが姿を消した真相は、サテュロスやファウ

ヌスから受ける好色な眼差しを嘆き悲しみ、また、そのためニンフの不滅性が失われたことに同情したレイミアが、彼女の姿を“unseen”で“invisible”なものに変えたというものであった。元から自らの願望を叶えるための取引材料としてニンフの姿を消したのか、サテュロスらに引き渡すのが忍びないが、神であるヘルメスであれば、自分の願いも叶えてくれ、ニンフの相手としても申し分ないと思ったのかは定かではないが、ここから、レイミアが、神であるヘルメスにも通じるほどの強大な力で視覚を操ることが明らかになる。ここで、キーツによって新たに加えられた挿話により、レイミアと「視覚」といったテーマが導入されていること留意する必要がある。

レイミアはニンフの姿を見えるようにする代わりに、元の美しい女の姿に戻してほしいとヘルメスに取引を迫り、恋に浮かされた者同士の取引は成立して、ヘルメスはニンフを連れて飛び去る。一方のレイミアは、壮絶な痛みと苦しみながらも、その痛みと引き換えに変身を遂げ、美しい人間の女の姿を手に入れる。レイミアの容姿の美しさを、語り手は“Ah, happy Lycius! – for she was a maid / More beautiful than ever twisted braid” (I.185-186) と表す。この語り手の口調はこの直後の描写によってわかるように、その言葉に反して皮肉な調子を帯びており、リシアスを待ち伏せするものの、レイミアはその美しい容姿で、彼を振り向かせることができない。エギナ島にジュピターへの捧げものをして、コリントに戻ったリシアスは、仲間と別れて一人歩きながらレイミアが待つ道に通りかかる。“Jove heard his vows, and better’d his desire” (I.229) と、ジュピターは彼の願いを聞き届け、願い以上のものを与えたと語られるが、これについて、ミリアム・アロット (Miriam Allott) は、ジュピターが結婚の神でもあることから、“Lycius’s ‘vows’ were

presumably offered for a happy marriage” (626) と結婚を願ったのではないかと推測する。一人歩く彼の頭の中は、“His phantasy was lost, where reason fades, / In the calm’d twilight of Platonic shades” (I.235-36) と、プラトン哲学の思考へと沈黙していく。ここにレイミアとリシアス二人の、すれ違いがすでに表れているように思われる。恋のために絶望的な痛みを乗り越えたレイミアのもとに、ついにリシアスが姿を見せる。ドラマティックな邂逅の場面になってもおかしくないこの時に、“Ah, happy Lycius!” とレイミアの美しさを称えた語り手は、しかし、その代わりに皮肉な出会いの場面を用意する。近づいてきたリシアスは、“Lamia beheld him coming, near, more near – / Close to her passing, in indifference drear, / His silent sandals swept the mossy green” (I.237-39) と、レイミアの存在に気づくことなく“indifference drear”の状態であっけなく過ぎ去っていく。このリシアスの姿を前にした時、語り手のレイミアの美しさの賞賛は逆にむなしく響き、そこにある矛盾が強調されることになると同時に、“So neighbour’d to him, and yet so unseen / She stood” (I.240-41) と、これほど近い距離にありながらも、“unseen”であり続けるレイミアの姿は、一転してレイミアの「視覚」に関する無力さを強く印象付ける。「視覚」を操ったレイミアは、ここで「見過ごされる存在」としての印象をはっきりと打ち出されることになる。

レイミアとリシアスの関係は「視覚」をめぐる展開する。リシアスを一方的に見つめるレイミアの視線が、繰り返し描かれる。そもそもレイミアがリシアスに一目ぼれしたのは、戦いで馬車を走らせるリシアスを、蛇の姿であった時に、“where she will’d, her spirit went” (I.205) という特殊な力を使って、一方的に覗き見したことから始まっている。

And once, while among mortals dreaming
thus,
She saw the young Corinthian Lycius
Charioting foremost in the envious race,
Like a young Jove with calm uneager face,
And fell into a swooning love of him. (I.215-19)

その時リシ阿斯は当然見られていることには気づいておらず、二人はその関係の始まりから、レイミアが見る側であり、リシ阿斯が見られる対象であったといえる。待ち伏せの場面でも、“he pass’d, shut up in mysteries, / His mind wrapp’d like his mantle, while her eyes / Follow’d his steps” (I.241-43) と、哲学的な思考にとらわれ、レイミアの存在に気づきもせず通り過ぎるリシアスの足取りを、レイミアの目は執拗に追いかける。ここで明らかになるのは、レイミアはどんなに美しい女の姿を手に入れても、視覚的にリシ阿斯を惹き付けることはできないという事実である。ではどのようにリシ阿斯を振り向かせたのか。それは聴覚への訴えによるものである。

レイミアの武器となるのはその美しい容姿ではなく言葉である。通り過ぎてしまったリシ阿斯に、“And will you leave me on the hills alone? / Lycius, look back! and be some pity shown.” (I.245-46) と呼びかけると、彼は振り向く。振り向いたリシ阿斯は、“And soon his eyes had drunk her beauty up, / Leaving no drop in the bewildering cup” (I.251-52) と視覚的に彼女の美しさをようやく認識することができる。しかし、レイミアの働きかけによって、ようやくめぐり合った二人の関係には、なお不安要素が残される。リシ阿斯が振り返ったのは、“For so delicious were the words she sung, / It seem’d he had lov’d them a whole summer long” (I.249-50) と、

レイミアの容姿ではなく“words”に惹かれていたことが、はっきりと描かれる。レイミアの言葉は、彼女にとってあくまで彼を振り向かせる手段に過ぎない。見つめてほしいのは美しく生まれ変わった自身の姿である。それは、苦痛に耐えた後、澄んだ泉に姿を映し、“she passioned / To see herself” (I.183-84) と自身を見つめる熱い眼差しからも伺える。待ち焦がれた容姿を手に入れた彼女の興奮と喜び、しかしリシ阿斯が振り向くのはレイミアが自ら恋するような美しい容姿ではなく、魔術的な彼女の言葉によってである。夏の間中、「彼女自身」ではなく「言葉」に恋していたかのように、わざわざ「言葉」に限定して描かれる様子から、レイミアが求めるリシアスの視線と、彼が向けた視線の本質が微妙に異なっていることが明らかにされる。リシ阿斯は、彼女の言葉を反芻し、“Leave thee alone! Look back! Ah, Goddess, see / Whether my eyes can ever turn from thee!” (I.257-58) とレイミアから目を離すことができないのだと言う。これこそ、レイミアが求めていた言葉であるに違いないが、しかしリシ阿斯はその後、次のように言う。

‘So sweetly to these ravish’d ears of mine
‘Came thy sweet greeting, that if thou shouldst fade
‘Thy memory will waste me to a shade:—
‘For pity do not melt!’ (I.268-71)

ここでも、リシ阿斯が魔術的なレイミアの声に魅了され、それが彼女を視覚的に認識するきっかけになったことが明らかにされている。リシ阿斯は聴覚によって彼女の美しさを捉えたのであって、視覚によってではない。つまり、レイミアは「視覚」のみならず、彼の「聴覚」も支配していなければ、通り過ぎ去られるだけの存在に逆戻りしてしまう

危険があるということになる。

このようにレイミアは一方的に見つめる存在として、リシアスに恋をし、振り向いてほしいと願いながら彼の足取りを視線で追いつけ、リシアスの視線を手に入れることに成功するが、それは自らの美しい姿、すなわち視覚によるものではなく、言葉、すなわち聴覚によるものである。さらに留意すべきは、レイミアがリシアスとの間に生じているこの差異に気づいていないという事実である。リシアスの心を手に入れたと確信しながらレイミアは、"she wonder'd how his eyes could miss / Her face so long in Corinth" (I.310-11) と疑問に思うに留まるのである。レイミアが手にしたのは、欲していたような彼女を見つめる熱烈な視線ではない。それは彼女の言葉に魅了されたリシアスの視線にすぎない。この時点で変身した彼女の姿に本当に魅了されているのは、泉に映してその姿を見た自分自身だけである。待ち望んだ美しい女の姿に生まれ変わったレイミアは、生まれ変わった姿が見たくてたまらずに、泉にその姿を映す。衣を水仙とともに翻らせて泉に自身の美しい姿を映すレイミアは、ナルキッソスを彷彿とさせ、その後の展開に不穏な影を落とすことになる。

こうしてレイミアとリシアスをめぐる「視覚」の問題を検討してみると、そもそも、冒頭のヘルメスとの出会いにおいて、この問題が現われていることが分る。ここでも、レイミアは見過ごされる存在である。ニンフを探すヘルメスの前に現れたレイミアは、魔術でその姿を隠されているわけではないのにも関わらず、さらに、その蛇の肉体の色とりどりの姿と派手な模様にも関わらず、その姿は見逃されてしまう。そして、ここでもレイミアがヘルメスにその存在を気づかせるには、聴覚的なアプローチに頼るしかない。

There as he stood, he heard a mournful voice,

Such as once heard, in gentle heart,
destroys

All pain but pity: thus the lone voice spake:
'When from this wreathed tomb shall I
awake!

'When move in a sweet body fit for life,
'And love, and pleasure, and the ruddy
strife

'Of hearts and lips! Ah, miserable me!'
(I.36-41)

このようにヘルメスやリシアスといった、振り向かせたい相手に向かって、言葉で呼びかけるレイミアの描写が繰り返されることによって、彼女が常に視線を送る側であり、視線を受け取る側ではないことを冷酷にも強調されることになる。レイミアはヘルメスのことも、"I dreamt I saw thee" (I.76) と一方的に見つめるに留まり、ヘルメスが称えるのも、"Thou smooth-lipp'd serpent, surely high inspired!" (I.83) と、彼女の言葉であることも、リシアスに対するレイミアの表象と重複する。

一方、見過ごされてしまうレイミアと対照的に描かれるのは、ヘルメスが探し求めるニンフである。"the sweet nymph might nowhere be found" (I.31) でありながら、ヘルメスは姿の見えないニンフを追いつける。ニンフはヘルメスのみでなく、様々な相手に求愛されており、愛の視線を受ける対象とされ、一方的に見つめる存在であるレイミアとは対照的な存在として描かれる。ニンフはレイミアによって姿を見えなくされているが、"Her loveliness invisible" (I.108) であってもヘルメスのように彼女を探し続ける存在が絶えることはない。ニンフもまたレイミアと同じ

“unseen” (I.96) という単語で表象されるが、自由と安全を謳歌するために“unseen”になりながらも、その存在に視線を注がれ続けるニンフと、姿を現しているにも関わらず、“unseen”と描かれ、愛する人に足早に通り過ぎ去られるレイミアとは残酷とも言える鮮やかな対象を成している。レイミアはニンフの姿を見えなくさせるような、視覚的なコントロールを行えるにも関わらず、リシアスの視線を自分に向かせることはできない。ヘルメスとニンフ、リシアスとレイミア、この二つの関係がパラレルだとすれば、ニンフとレイミアの描かれ方は実に鮮やかなコントラストを成している。そしてこのコントラストは、“Real are the dreams of Gods, and smoothly pass / Their pleasures in a long immortal dream.” (I.127-28) と表される、神の永遠性に対する人間の刹那性という対比を明らかにする。ウォルター・ジャクソン・ベイト (Walter Jackson Bate) は、“The implication is that the happy union to which Lycius later aspires is possible only to immortals.” (553) と、二組のカップルの違いを指摘する。レイミアが一目ぼれしたリシアスは神の姿に例えられる。しかし、神の似姿を持つリシアスを神の代替物として神の永遠を手に入れようとしても、それはまがい物に過ぎないのであり、レイミア自身もニンフにはなれないのである。そして、レイミアは、蛇の姿で会った時から、すでに、“She had a woman’s mouth with all its pearls complete” (I.60) と人間の女の口を持っていたのである。

また、振り向きリシアスは“Orpheus-like at an Eurydice” (I.248) と例えられる。振り向いてはいけないという言いつけを破り、永遠にエウリュディケを失うことになるオルフェウスに、振り向いたことでレイミアを手に入れることができたリシアスが例えられているというのは、二人のその

後の破滅を予期させる。さらに、オルフェウスは音楽の力でハデスとペルセフォネを説得し、妻を冥府から連れ戻すことが許されるのだが、声や音楽といった聴覚を利用するレイミアと男女の役割は違うものの共通点を感じさせる。また、後ろにいる妻の姿を見てしまい、永遠にペルセフォネを失うオルフェウスと、真の姿を見てしまう、そして見られてしまうために、愛を引き裂かれるリシアスとレイミアの姿は、聴覚による訴えへの成功と、視覚による訴えへの失敗という点で重なり合うものがある。また、エウリュディケは毒蛇に噛まれて命を落とすが、ここでエウリュディケにたとえられるレイミアが蛇女であることは、語り手の皮肉な眼差しを感じさせる。

3

レイミアが、視覚的には見過ごされがちな存在でありながら、聴覚によるアプローチにより、成功を手にするのは、“A virgin purest lipp’d, yet in the lore / Of love deep learned to the red heart’s core” (I.189-90) と、レイミアが恋の知識に精通し、相手を誘惑する手練手管に長けているためとも考えられる。レイミアは、さらに、“As though in Cupid’s college she had spent / Sweet days a lovely graduate, still unshent, / And kept his rosy terms in idle languishment.” (I.197-99) と描写され、その手腕は、レイミアに夢中になったリシアスの心を翻弄する場面に現れる。二人が出会うまでは、“Lycius, look back!” (I.245) と、レイミアがリシアスに対し懇願する立場だったのに対し、その声で彼を魅了してからは、立場が逆転し、リシアスがレイミアに対して、“Stay! though a Naiad of the rivers, stay!” (I.261) と懇願するようになる。すると、レイミアはすぐにリシアスの思いに答えずに彼の気持ちを翻弄し、偽

“Lycius, look back!”

りの別れの言葉を告げ、衝撃のあまりリシアスを失神させてしまう。その時のレイミアは、「運命の女」そのものとして描かれていると言っていいだろう。

The cruel lady, without any show
Of sorrow for her tender favourite's woe,
But rather, if her eyes could brighter be,
With brighter eyes and slow amenity,
Put her new lips to his, and gave afresh
The life she had so tangled in her mesh:
(I.290-95)

“The cruel lady”と明言されるレイミアは、自分に夢中になり苦しむリシアスの姿に悲しみではなく、残酷な喜びを覚える。そして、忘我状態のリシアスに向かって、“she began to sing, / Happy in beauty, life, and love, and every thing, / A song of love, too sweet for earthly lyres” (I.297-99) と美しい恋の歌を歌う。そしてリシアスに心を打ち明けるレイミアは、“Use other speech than looks” (I.304) と、その外見よりも言葉を使って、震える声で囁きかける様子が描かれる。レイミアは自分を神聖な存在として畏怖するリシアスを見て、「運命の女」のような振る舞いをやめてその方針を変え、“For that she was a woman, and without / Any more subtle fluid in her veins / Than throbbing blood” (I.306-08) と、自分は“subtle”な存在などではなく、リシアスと同じふつうの人間なのだと告げる。そして、コリントの暮らしに満足していたが、“Till she saw him, as once she pass'd him by” (I.315) と、リシアスを見かけてから、ずっと恋をしていたと言う。忘我状態から目覚めたリシアスはレイミアの美しい歌に驚き、さらに魅了されることになる。

Lycius from death awoke into amaze,
To see her still, and singing so sweet lays;
Then from amaze into delight he fell
To hear her whisper woman's lore so well;
And every word she spake entic'd him on
To unperplex'd delight and pleasure
known. (I.322-27)

ここで、リシアスを魅了し誘惑するのは、“singing so sweet lays”と書かれる彼女の美しい歌声と、それが紡ぐ言葉“every word”であり、レイミアはその歌と言葉とを武器にリシアスの聴覚を通じて彼の心を支配したと言えるだろう。アロットが、“‘The cruel lady’ and her entrancing song recall *La Belle Dame Sans Merci*” (629) と言うように、*Lamia*は1819年4月に書かれ、翌1820年に発表されたキーツのバラッド詩、“*La Belle Dame Sans Merci*”に描かれる、男を虜にする「運命の女性」を彷彿とさせる。“threw the goddess off” (I.336) と女神のようなふるまいをやめて、一人の女としてリシアスに向かい合ったレイミアは、そのすぐ前にレイミアを“The cruel lady”と呼んだ語り手から“gentle lady” (I.334) と形容される。これは、かawaii人間の女のふりをするレイミアを揶揄しているとも取れるが、そもそもの登場の場面から、まだ蛇であったレイミアが持っていた、美しくかつ恐ろしいという彼女の両義性を示しているようにも思われる。

レイミアはこのようにして、リシアスの心を捉えた。声、歌、言葉。それはすべて聴覚を通じたレイミアの恋愛のテクニクと呼べるものである。実際、リシアスは“Lycius to all made eloquent reply, / Marrying to every word a twinborn sigh” (I.340-41) とレイミアの言葉すべてにため息をもって答えるまでに、その声に魅了されているのである。恍惚としたリシアスは、レイミアが

歩く距離を短縮するために、“a spell” (I.345) を用いたことにも気がつかない。愛し合う二人は、しばらく宮殿で人知れず愛を育むことになる。

しかし、コリントの人びとから逃れるように暮らしてきたリシアスは、第二部冒頭の場面でふと聞えてきた世俗の音をきっかけにして、その心をざわめかせる。

When from the slope side of a suburb hill,
Deafening the swallow's twitter, came a thrill
Of trumpets—Lycius started—the sounds fled,
But left a thought, a buzzing in his head.
(II.26-29)

聞えてきたのは、レイミアの魔術的な美しい歌声とはまったく異なる、世俗的なトランペットの音色である。そこに、レイミアの持つような幻想的な美しさは存在しない。しかし、その音こそが、リシアスの頭にいつまでも残り、彼の魂を “His spirit pass'd beyond its golden bourn / Into the noisy world almost forsworn” (II.32-33) と、一度は離れたはずのコリントに飛ばし始める。トランペットの音色が、“*La Belle Dame Sans Merci*” の遍歴の騎士同様に、リシアスを「運命の女」の魅力から覚醒させることになるのだが、レイミアの悲劇は、つれなき美女とは異なり、その時、その姿を消すことができなかったことにある。その悲劇は、「視覚」をめぐる表出することになるのである。

リシアスは “a prize” (II.57) である美しい花嫁を人々に見せたいのだとレイミアに告げる。ここでレイミアはリシアスにとっての純粋な愛の対象ではなく、群衆の「視覚」に曝され、“the hoarse alarm of Corinth's voice” (II.61) を得るための「戦

利品」に過ぎないことが明示される。トランペットの音の介入が、脆い基盤の上に何とか成り立っていた二人の関係を一瞬で揺るがすものとなった。これによって、リシアスが耳にしたいのは、魔術的なレイミアの声ではなく、彼の虚栄心を満たすコリントの人々の世俗の声に変わる。聴覚への支配が終わりを告げるとき、二人の関係は崩壊への一途を辿っていく。そして、誘惑し、相手を翻弄する「運命の女」レイミアと、その被害者リシアスという構図は鮮やかに逆転し、今度はリシアスがレイミアに残酷な喜びを覚える様子が語られる。

He thereat was stung,
Perverse, with stronger fancy to reclaim
Her wild and timid nature to his aim:
Besides, for all his love, in self despite,
Against his better self, he took delight
Luxurious in her sorrows, soft and new.
His passion, cruel grown, took on a hue
Fierce and sanguineous as 'twas possible
In one whose brow had no dark veins to swell. (II.69-77)

考えを変えてほしいと泣いて懇願するレイミアを見るリシアスの目には残虐な喜びの炎が灯っている。そしてレイミアは、そんなリシアスに対し、“she lov'd the tyranny” (II.81) と従順な態度を見せ、婚礼を行うことに同意してしまう。聴覚を支配することができなくなったレイミアの悲劇にさらに追い打ちをかけているのは、これまで武器にすることができなかった美しさという彼女の視覚的な魅力に対し下された初めての評価が、群衆の「視覚」を魅了する「戦利品」としてのものであるという皮肉である。

レイミアと「視覚」の悲劇はさらに続き、レイ

ミアにその最期をもたらすことになる。レイミアが唯一リシアスに課した条件は、彼の師であるアポロニウス (Apollonius) を婚礼の場に招待しないほしい、というものだった。第一部の終わりに初めて登場する老アポロニウスは、すれ違った二人を恐怖させる存在として描かれる。リシアスは、アポロニウスを、“’Tis Apollonius sage, my trusty guide / And good instructor; but to-night he seems / The ghost of folly haunting my sweet dreams.” (I.375-77) と、彼の甘い夢に現れる亡霊のようだと恐れる。レイミアはアポロニウスの存在が二人の決定的な破滅を引き起こすことを知っていた。しかし、語り手に“O senseless Lycius! Madman!” (II.147) と強く非難されるリシアスは、二人の別離の予感に鈍感である。始め、訪れた客たちは宮殿の豪華さに怪しんだが、酒が入り陽気な気分になると、疑いの気持ちは霧散してゆく。ここでも、音楽への言及がなされる。

Soft went the music the soft air along,
While fluent Greek a vowel'd undersong
Kept up among the guests, discoursing low
At first, for scarcely was the wine at flow;
(II.199-202)

酒が入り和やかになった会場の空気を凍らせたのは、アポロニウスの介入であった。招かれざる客であった彼は恐怖するレイミアに残酷な視線を向ける。

The bald-head philosopher
Had fix'd his eye, without a twinkle or stir
Full on the alarmed beauty of the bride,
Brow-beating her fair form, and troubling
her sweet pride. (II.245-48)

“He gaz'd into her eyes” (II.256)、さらに “More, more he gaz'd” (II.258) と、ついにレイミアはリシアスの視線を手に入れるのであるが、その視線によって得られた姿が、見られることを最も恐れた自らの蛇の姿であったところが、レイミアを巡る「視覚」のアイロニーと悲劇が最終的に行き着くところである。

愚かなほど豪華な婚礼の場で、一人きり待つレイミアを支えたものは、“A haunting music, sole perhaps and lone / Supportress of the faery-roof, made moan / Throughout, as fearful the whole charm might fade.” (II.122-25) という音楽のみであった。“Keats describes sound even more sensuously than light and odor” と指摘するリチャード・ハーター・フォグル (Richard Harter Fogle) は、上記の詩行を引用した上で、“music is possessed of architectural solidity and strength” (115) と分析する。クロード・リー・フィニ (Claude Lee Finney) は、ジョン・ミルトン (John Milton) の *Paradise Lost* において、Pandemonium が “the magical power of music” によって建てられているのと同じように、レイミアの宮殿も音楽の力によって建てられているとして、上記の詩行をその例の一つとして挙げている (674)。トランペットの音色によってその言葉の呪縛が破られたとはいえ、こうした音楽に見られる「聴覚」による彼女の影響力は、いまだ完全に失われたわけではなかった。アポロニウスが登場する前の場面では、レイミアの優しい魅力的な音楽と、来客たちが話すギリシア語の響きが共存している。それは、まるでどちらが勝利するのか、その展開を見定めているようでもあるが、陽気な酒が入ることによって、同時に “Louder they talk, and louder come the strains / Of powerful instruments” (II.204-05) と一種の聴覚上の融合の可能性も示しているように思われる。世俗の音

は、レイミアの音楽との融合の可能性を見せていた。

アポロニウスの登場後、リシアスの悲痛な叫びを受け、“The many heard, and the loud revelry / Grew hush; the stately music no more breathes; / The myrtle sicken’d in a thousand wreaths.” (II.262-64) と、音楽だけでなく、人々の話し声もすべてが死のような沈黙に変化する。リシアスは、レイミアを苦しめるアポロニウスの視線の力に気づき、“Shut, shut those juggling eyes, thou ruthless man!” (II.277) と、その目を閉じろと言って彼の師を非難し、アポロニウスの目を“his demon eyes” (II.289) と呼ぶのである。そして、その悪魔の目が“the sophist’s eye, / Like a sharp spear, went through her utterly, / Keen, cruel, perçant, stinging” (II.299-301) と彼女を貫いた。そして、“A Serpent!” (II.305) という叫びを受けて、レイミアは姿を消す。残されたリシアスは死を迎えるのである。

4

レイミアは振り返ることを要求する。それは作中示されるように、キューピッドから学んだ愛のテクニックなのかもしれない。しかし、いくらレイミアが手練手管で翻弄しているように見えようが、結局リシアスとの関係は、彼女がこっちを見てと常に呼びかけていなければ終わりを迎える脆い関係に過ぎない。第二部において徐々に外の世界へと心惹かれていくリシアスに対して従順に従うレイミアの姿は、二人の力関係が逆転したというより、幻想が消えて、見過ごされる存在であるレイミアと、その視線を受け、愛される側であるリシアスという本来の構図が再び姿を現したにすぎないのである。レイミアはリシアスやヘルメスの目に留まることを望みながら、視覚的な力で

は彼らを振り向かせることはできず、彼女の持つ魔術的な言葉に頼る。しかし、彼女が唯一求めなかった視線、リシアスの師であるアポロニウスの、彼女の正体を暴くその視線だけは、求めずしても真っ直ぐに向けられるというのは辛辣な皮肉である。

レイミアは語り手に、“The cruel Lady” と形容されるが、見過ごされるレイミアの本質は、“the cruel Lady” という表現から隔たったところにある。また、第一部と第二部で、悪魔的な誘惑者と従順な被害者という、一見正反対の姿を見せるレイミアであるが、聴覚に頼り、視覚的に見過ごされる存在であるという点では一貫したイメージを貫いていると言える。

レイミアの悲劇性は、作品内に留まらない。レイミアがニンフの姿を見えなくした理由は、“And by my power is her beauty veil’d / To keep it unaffronted, unassaul’d / By the love-glances of unlovely eyes, / Of Satyrs, Fauns, and blear’d Silenus’ sighs.” (I.100-103) というように、醜悪な目の愛なき視線の攻撃から、その美貌を護るためであった。確かにニンフはそのような視線、“unlovely eyes” の“the love-glances” からは逃れることができた。しかし、レイミア自身の姿は、キーツの創作から数十年が経過した後、「運命の女」の格好の題材としてラファエル前派の画家たちによって描かれ、好奇や欲望の視線にさらされることになる。

ラファエル前派の画家ジョン・ウィリアム・ウォーターハウス (John William Waterhouse) が描いた二枚のレイミアの絵は、「運命の女」でありながら悲劇的なレイミアの本質を捉えている。1905年に描かれた図1では、見つめあう二人が描かれる。しかし、レイミアの側は必死な眼差しでリシアスを見つめているのに対して、リシアスは彼女の魔術にかけられているからとはいえ、心こ

“Lycius, look back!”

ここにあらすといった虚ろな視線で彼女を見つめ返している。下から見上げるレイミアと、上から見下ろすリシアスの構図からは、後に転倒する二人の力関係が読み取れる。1909年に描かれた図2は、レイミアが、美しく変身した自身の姿を泉に映して見とれている場面だが、レイミアに視覚的に魅了されるのが、レイミア自身でしかないという事実を映し出していると言えよう。さらにその無防備な姿は、リシアスではなく、画家によって、そして、画家の筆を通じて観客によって、盗み見られている。

レイミアは、“Pale grew her immortality, for woe / Of all these lovers, and she grieved so” (I.104-105) と、ニンフが数々の欲望の視線に耐えきれず、その不滅性が衰え、嘆き悲しんでいたこ

とを語る。だが、皮肉なことに絵画となり好色の視線を受けることで彼女の姿は現在まで鮮やかに生き延び、ある種の不滅性を帯びることになった。ニンフに対して視覚的なコントロールをする力を持ちながら、自らに視線を向けさせることはできなかったレイミアが受けた望まぬ視線は、作中でのアポロニウスの“demon eyes” (II.289) と、美しさを失った自分を見つめるリシアスの視線だけではなかった。絵画となり、“the love-glances of unlovely eyes” の視線を受け続けることになるレイミアの数奇な運命を考えたとき、彼女の前を通り過ぎていくリシアスに呼びかける、“Lycius, look back!” という台詞はより痛切に響いてくるのではないだろうか。



図1 《『レイミア』、ウォーターハウス、1905》(川端 118)

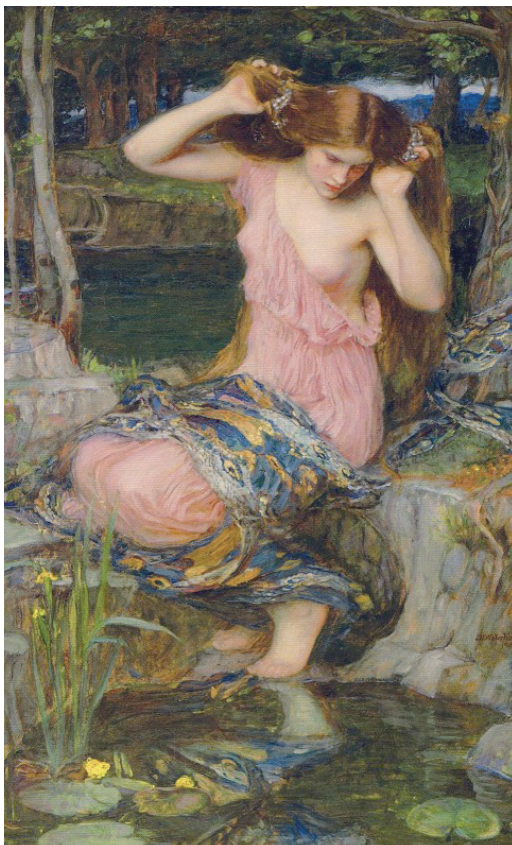


図2 《『レイミア』、ウォーターハウス、1909》(川端 119)

Works Cited

川端康雄・加藤明子『ウォーターハウス 夢幻絵画館』東京：東京美術、2014.

- Allott, Miriam. "Notes." *The Poem of John Keats*. By John Keats. London: Longman, 1970. 613-48. Print.
- Bate, Walter Jackson. *John Keats*. Cambridge: Belknap Press of Harvard University Press, 1964. Print.
- Finney, Claude Lee. *The Evolution of Keats's Poetry Volume 2*. New York: Russell & Russell, 1963. Print.
- Fogle, Richard Harter. *The Imagery of Keats and Shelley: A Comparative Study*. Chapel Hill: Univ. of North Carolina Press, 1949. Print.
- Keats, John. *The Poetical Works of John Keats*. Ed. H W. Garrod. Oxford: Clarendon Press, 1958. Print.
- . *The Letters of John Keats, 1814-1821 Volume 2*. Ed. Hyder Edward Rollins. Cambridge: Harvard University Press, 1958. Print.

“Lycius, look back!”

“Lycius, look back!”:
On the theme of gazes in “Lamia”

Megumi KUMAGAI

[abstract]

In this paper, I analyze problems of gazes for Lamia the protagonist of John Keats’s narrative poem, “Lamia.” Lamia, the serpent woman transformed into a beautiful woman, has been regarded as the typical “femme fatale” that leads a man to ruin. At the same time, since the descriptions of Lamia in the first and the second parts are very different, the poem has often been criticized for its inconsistency in characterization of Lamia. However, when we examine complicated descriptions of visual and auditory charms concerning Lamia closely, the tragic aspect of her is made clear which is quite different from the conventional “femme fatale” image as a cruel beauty who plays on man’s feelings. In this study, by analyzing the gazes at and of Lamia and focusing on Lamia as a presence to be overlooked, I attempt to reveal the Lamia’s tragic destiny.

Although Lamia acquires a beautiful human appearance in exchange for a severe pain, she cannot attract Lycius visually at all. She captivates his heart not through a visual charm of her personal beauty but through auditory means of her voice and words. However, it is also a fragile relationship which collapses easily when her magical auditory control over Lycius ends. In fact, it is the secular sound of trumpets that moves Lycius’s heart and brings their love to a close.

Lamia, who wants to catch the eyes of Lycius, cannot possibly make him turn around by her visual power, and cannot but rely on her magical auditory power instead. Accordingly it is really ironic that she catches Apollonius’ eye, so that he reveals her original form of a serpent.

After several decades, Lamia was painted by Pre-Raphaelites on Keats’ poem as a subject of “femme fatale” and has been exposed to gazes of curiosity and desires. Ironically, such lustful gazes have enabled Lamia’s image to survive through many decades and gave her a kind of immortality.

[key words]

John Keats, “Lamia”, theme of gazes